

主 題	たのしむことがつづくコツ
副 題	川柳教室をきっかけに、継続する方法を探る。

脳トレ	活動プログラム	研究期間	22 ヶ月
-----	---------	------	-------

事業所	社会福祉法人聖風会・デイサービスセンター はなはた		
発表者：石鍋 信夫（いしなべ のぶお）		アドバイザー：大竹 光子（おおたけ みつこ）	
共同研究者：國井 和則（くにい かずのり） 安本 聡（やすもと さとし）			

電 話	03-3885-4864	E-mail	sinseien@seifuukai.or.jp
F A X	03-3860-0950	U R L	http://www.seifuukai.or.jp/

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	平成元年開設。特別養護老人ホーム、地域包括支援センター、ケアマネージメントセンターを併設。一般通所介護・介護予防通所介護：定員 35 名/日、認知症対応型通所介護：定員 12 名/日。 行動指針として『真心と思いやり、笑顔あふれる和のケア』を掲げている。
------------------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

当デイサービスでは段々と重介護者が増加している現状がある。それに合わせるために活動内容を誰でも参加でき、分かり易くするあまりに一部ご利用者より簡単すぎると不満があがった。

そこで、皆さんの意見を取り入れて脳トレ効果のある川柳教室を開催していくことになった。

しかし、デイで覚えた体操を自宅では行わない…という方が多いのが現状。自宅でも継続的、また習慣にできる方法を次第に探るようになる。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

デイにおけるご利用者の主な3つのニーズとして

1 社会的孤立感の解消

2 心身の機能の維持

3 家族の負担軽減

があがる。この内『心身の機能の維持』にあたる脳のトレーニング（川柳教室）を行うなかで、継

続してもらえるための方法を含めて検討する。

期待する効果として、3つの目標を立てた。

- ① 脳の活性化に繋げる。
- ② 句を通して、自分の存在を皆さんに知ってもらい、様々な人と交流を図る。
- ③ 自宅でも“継続的”に脳のトレーニングを行ってもらう。

《3. 具体的な取り組みの内容》

【進行状況】

○川柳教室は毎月3日間、開催時間は1時間程度。お茶を飲みながら静かな雰囲気の中で行う。

○参加人数は当日30名中8名程度が川柳教室を希望され参加。職員は進行と記録の2名で担当。

○作品は当日までに持ち寄り自分の作品を読み上げ感想を共有していく。

○内容は川柳でも俳句でも良いこととするが川柳と俳句4：6で俳句の方が多い。

【たのしむことの工夫】

○初回は実物のイモをみて興味を引き出す。

○利用者の意見をすぐに反映。主体性を大切にす
る。

○句のできた背景を大切にその想いを聴く。

○できた作品を壁新聞で掲示する。

○平成 25 年 12 月で 378 の句が集まる。1 年
間の集大成として句集を作製し、ご利用者やご家
族などへ配布する。

○意欲の維持、向上を図る為、デイの月刊誌に投
稿し掲載を目標とする。

○職員からも句を募集し月刊誌に投稿する。

《4. 取り組みの結果と考察》

①脳の活性化…川柳には「うがち」「かるみ」「お
かしみ」の3要素がある。それらを活動の中で自
然にたのしみながら考えていくことで日常的に脳
のトレーニングをしていたことが分かる。

②こころの交流…壁新聞や句集を通し会話が生ま
れ様々な人との交流が増える。また、デイのブロ
グに句を掲載すると海外に住むご家族からうれし
い知らせが届いた。

③自宅で継続的に考える…デイの月刊誌に句を投
稿し、半年で 13 人掲載され嬉しさも皆で共有で
きた。頑張ったことが形になると成功体験として
の自信や向上心が増し、さらに多数の句が集まる
ようになった。また、ご利用者より「家での楽し
みが増えた」「家で何もすることがなかったが散歩
や通院、テレビや新聞など日常で川柳を考える様
になった」「夜中、急に句が思い浮かびカレンダー
にメモをとることもある」。ご家族からも反響が届
き（インタビュー有り）「今までテーブルで何かを
書く姿は見たことがない」と喜ばれる、などなど。
○職員も自信をもつ。職員からも句を募集し投稿
すると月刊誌に掲載された。ご利用者から「むず
かしいよ～」との話があると「私もそう思ってい
ましたが、何気なく思いついたものもいいですよ」
と自信を持ったアドバイスが見られる様になっ
た。

《5. まとめ、結論》

①デイにおけるご利用者の主な3つのニーズに対
して『心身の機能の維持』に焦点をあて活動して
きたが結果としてすべてに応えた形となった。

②大人のクラブ活動となる。ご利用者の求めてい
ることは「遊びたい」ということより「学びたい」
とい方も多い。その「学ぶ姿勢」こそが大人のク
ラブ活動へと成長した推進力となった。

③川柳教室を行った事でご利用者の向学心が向上
し、句が集まるようになった。自宅でも句をつく
るなど川柳が生活の一部となり、その変化こそが
私達職員が求めるデイサービスの活動目的であ
る。また、その職員自らが楽しむ事が活動に含ま
れていると感じる。義務的でない楽しむ気持ちが
ご利用者、ご家族に伝わり『人は楽しくないと継
続出来ない』という事を改めて実感する事が出来
た。

④この楽しむ気持ちの循環はデイサービス全体の
雰囲気となり他の活動やチームワークに良い影響
につながっていった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、顔写真や氏名
など個人に関わることを掲載する事を、ご本人（ご
家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では
使用しないこと、それにより不利益を被ることは
ないことを説明し、回答をもって同意を得たこと
とする。

《7. 参考文献》

「50 歳からはじめる俳句・川柳・短歌の教科書」
監修:東直子・坊城俊樹・やすみりえ（土屋書店）

《8. 提案と発信》

『たのしむことがつづくコツ』とは？
ご利用者自身の「学びたい」という気持ちを引き
出し、職員も一緒に考え学ぶ！
また、“素直”に楽しいと思える気持ちが大切で
ある！

【メモ欄】